

を究した阿武川下流に形成されたデルタ上に発達した都市で、その中心となる旧城下町は、東・南・西の三方をあまり高くない山岳とそのふもとをめぐる阿武川派流松本川・橋本川の清流に抱かれ、北は、北長門海岸国定公園である海岸を含み、山と水の景色豊かな美しい土地である。」

ここで紹介したのは、城下町を流れる一本の水路のことである。阿武川が分れて、松本川、橋本川と名前をかえるあたりを川島という。この一帯は、城下町時代の田畑地であり、その用水確保のために、川の分岐点に取水口を設けた。幕末の古絵図をみると、水が流入し易いように岩石を配置し、取水口には上げ下げ式の簡単な水門を設け、その近くに樋番屋敷が画かれている。この水路も当初は、小さな溝だったのが、おそらくこの一帯にも人家が増えたためであろうか、延享四年（一七四四）に開削して大溝と称するようになった。中流附近にあつたという藍場川とゆんで、今では藍場川と呼ぶ。川幅は二〜三米程である。この大溝は、田畑地を流れるあたりでは、ゆるやかなカーブを持って流れ、城下町の規格化

された武家地・町人地に入ると直角に折れ曲がりながらやがて、城の外堀、さらに日本海へとつながる。

この水路は、本来の目的である農業用水としての役割から次第に、城下町に薪炭・米・塩・味噌醤油等の日用品を供給するための舟運に利用されるようになった。川に沿った家々の台所は、すべて川に接して設けられ、土間から数段の石段で川面に降りるようになっていた。一番下の石段は少し幅広くなっており、ここにしゃがんで野菜・食器洗い、洗濯をする。この場所には、川沿いの道を通る人の目をさえぎるための板囲いがあり、「ハトバ」または「ハタバ」と称している。川を通る舟が日用品を売りに立ち寄るから、というのが前者のいわれで、後者は、藍場に関係がある、と土地の人は云うのであるが、どちらももっともらしい。このように使われていた大溝が、人々の日常生活にとって、たいへんに重要な役割を持っていたに違いない。

前述のごとく、取水口近くに樋番屋敷があつた。この家が、明治九年の前原一誠の乱の際、打ち込まれた鉄砲の弾を建具に残したまままで現存する。このあたりの家で